

真花月香相伝式法

無耳庵(杉田)克誠写 文化九年六月 一冊 写本

国立国会図書館所蔵

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の()は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の()は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

真花月香相傳式法書

真花月香相伝式法書



真花月香相傳式法

御家流香道弥(いよいよ)稽古勝り、木所の修行、予め会得するに於いては、依つて「真花月香」を伝う。花月香は、香組六種にして、陰陽六の木所五味を加味して伝う式法なり。両香元、「花方」「月方」と立列れ、焚き様、香道具飾付け手続きに至るまで、口授多し。勿論「行」の式法なり。花月香に「真」の字書く事、風早家の頃より起こると見えたり。

- 六木所陰陽傳授
- 一 伽羅禮陽
 - 二 羅國樂陽
 - 三 寸間多羅射陽

- 六木所陰陽伝授
- 一 伽羅 礼陽
 - 二 羅國 樂陽
 - 三 寸間多羅 射陽

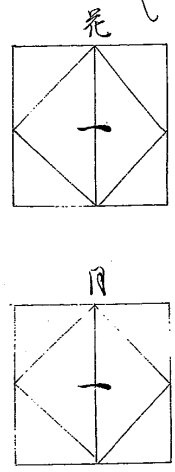
四 真那蛮 御陰 五 真那賀 書陰 六 佐曾羅 數陰
外 赤梅檀 文 一包添えて

右の分、傳授の節、木品正補を門弟にあたうるなり。尤も五味
意兼備うる木所なれば、吟味專要なり。

花月香札の裏 表札
袖振山 吉野山 小倉山 春日山 三笠山
高間山 葛城山 暗部山 小塩山 立田山
同裏
花一花二花三月一月二月三月 以上六枚なり

花月香札十炷香札の裏に「花一」「花二」「花三」「月一」「月二」「月三」
の印これ有るなり。此の印を用いてもよし。その時は、十炷香札紋の
まま記録に認むる事もあり。

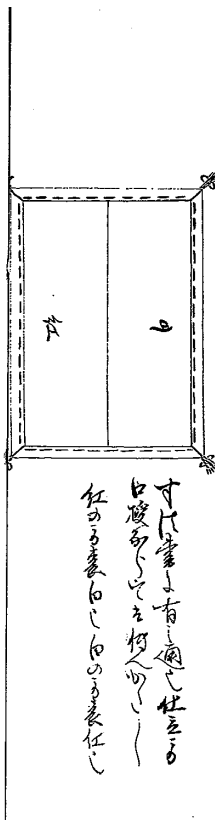
一 札筒は用いず、「折居」ばかりなり。折居の拵え様は、花方折居「一」「二」「三」、
月方折居「一」「二」「三」。花方「桜」の絵様、月方は「秋の最中」の絵様
なり。尤も彩色結構は好み次第、尤も絹地表、各裏金なり。大概図左
の通りなり。



花 [図] 月 [図]

「折居の図」

- 一 香匙用事より、香元花入の、開家集も有時、
喉、也、香筋あり、木所正敷故、香終りて元の包へ「花一」「花二」
- 一 火末入飾事あり、木所正敷を香流く元の包へ「花一」「花二」
包三」「月一」「月二」と中香減火末束と包を
- 一 花月香打敷、紅白織交地、縹子、縹子の類し、竹銀、紅白
打糸二筋なり、白の表は紅、紅の表は白なり



- 一 香席着順の後、打敷「紅」の方、花方香元、同向こう「白」の方は月方
なり。香元の左右に立列れ聞くなり。「花方」右、「月方」左なり。倭にては、
- 一 「陰中の陽」を取り用うる故に「月」を左に置くなり。
あたらし夜の霞行くさえおしきかな花と月とのあけがたの山

- 一 花月香初座に木拵有るなり。尤も飾り替之これ有る間、中立有りて料
理も出す事なれども伝授の節は時刻に順い、その沙汰なし。
- 一 席中、高貴人「花方」上座なり。尤も香会の節は闔にて座順、
を定める事も有るなり。時宜に任すべし。貴人へ参らする札

- 一 香匙用うる事なし。香元、老人なれば香匙用うる事も有り。時宜に
順うべし。香筋にて残らず済ます事式法なり。
- 一 火末入飾る事無し。木所正敷故、香終りて元の包へ「花一」「花二」
「花三」「月一」「月二」「月三」と本香、試(香)とも火末を包み置くべし。
- 一 花月香打敷、紅白織交地、縹子、縹子の類なり。尤も縁、紅白
打ち糸二筋なり。白の表は紅、紅の表は白なり。

〔図〕

寸法書に有る通りなり。仕立て方、口授ならでは伝えがたし。紅の方表白なり。白の方表紅なり。

- 一 花月香初座に木拵有るなり。尤も飾り替之これ有る間、中立有りて料
理も出す事なれども伝授の節は時刻に順い、その沙汰なし。
- 一 席中、高貴人「花方」上座なり。尤も香会の節は闔にて座順、
を定める事も有るなり。時宜に任すべし。貴人へ参らする札

後京極良經公詠 (秋篠月清集 1046)

「會立列の盆に載せ、執筆取次ぎを以て参らす事もあり。時宜に任すべし。」

一 三秘香の式は他流宗匠たりとも、連入、連座除くなり。

一流の内のたりとも、その伝受けざる仁、秘香の席へ交り申すまじきなり。

一 真花月香、門人相伝の節は、師弟とも忌穢吉辰を撰び、門弟へ

「花月香免許」の旨、結状式法なり。尤も兼約の上、手紙にて済ます

事も有るべし。時の模ように順うべし。

なお、御礼服御着用、則ち起請文下書き進ぜ候。その節、本書御持参為さるべく候

一 筆啓上致し候。然らば貴殿、御家流香道淺からず御執心に依り、此の度

「真花月香」相伝申すべく候。依つて何月何日拙亭へ御入来

これ有るべく候。恐々謹言

何月何日 居判

一 起請文下書き左の通り

起請文の事

一 御家流香道執心に依り、此の度「真花月木所気味」の極秘まで

御相伝の上は、此の後、他流の稽古決して仕るまじき事

一 万一死亡並び無掃筋にて修行中絶の節は、御秘書、聞書に至るまで、

その時の先達へ相納め申すべき候事

「會立列の盆に載せ、執筆取次ぎを以て参らす事もあり。時宜に任すべし。」

一 三秘香の式法は他流宗匠たりとも、連入、連座除くなり。

一流の内のたりとも、その伝受けざる仁、秘香の席へ交り申すまじきなり。

一 真花月香、門人相伝の節は、師弟とも忌穢吉辰を撰び、門弟へ

「花月香免許」の旨、結状式法なり。尤も兼約の上、手紙にて済ます

事も有るべし。時の模ように順うべし。

なお、御礼服御着用、則ち起請文下書き進ぜ候。その節、本書御持参為さるべく候

一 筆啓上致し候。然らば貴殿、御家流香道淺からず御執心に依り、此の度

「真花月香」相伝申すべく候。依つて何月何日拙亭へ御入来

これ有るべく候。恐々謹言

何月何日 居判

一 起請文下書き左の通り

起請文の事

一 御家流香道執心に依り、此の度「真花月木所気味」の極秘まで

御相伝の上は、此の後、他流の稽古決して仕るまじき事

一 万一死亡並び無掃筋にて修行中絶の節は、御秘書、聞書に至るまで、

その時の先達へ相納め申すべき候事

一 御流儀の書籍本のまま差し置き、私作意を以て認め替へ申すまじく
鏤梓仕るまじき候事

右の條々一事を為すと雖も違反する者に於いては

日本六十余州大小の神祇、別して伊豆・箱根両所、
權現天満太政自在天神の神罰蒙るべき者なり。因つて神文
權現天満太政自在天神可蒙 神罰者也因西雙
如件

年号月日

何の誰殿

何の誰
各業居判

右中書大奉書二つ折りに認め、上包、美濃紙打掛くなり。

此

起請文

何の誰

一 眞花月香、同流同門の内、相伝相濟み候仁、兼ねて案内申し置き、
當日、定刻出席有るべく候。尤も相手香元、執筆等、兼ねて約談
申達すべく候

一 當日、師家床飾り、供香、空焚等の式、必ず有るべく候

一 前座、後座「行」の式法、勘弁を以て作舞これ有るべき儀は勿論、麁略の儀
あるまじく候事

有間及小更

一 床脇に棚飾りあるべし。尤も前座、木拵えの飾り大概図の通り

〔起請文上包の図〕

此の如し

起請文

〔図〕

何の誰

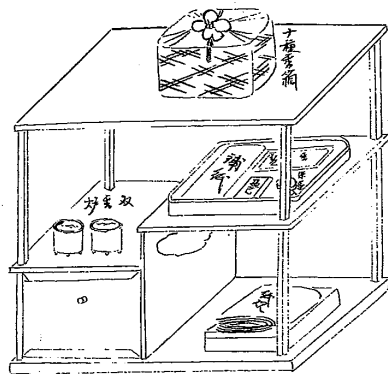
一 眞花月香、同流同門の内、相伝相濟み候仁、兼ねて案内申し置き、
當日、定刻出席有るべく候。尤も相手香元、執筆等、兼ねて約談
申達すべく候

一 當日、師家床飾り、供香、空焚等の式、必ず有るべく候

一 前座、後座「行」の式法、勘弁を以て作舞これ有るべき儀は勿論、麁略の儀
あるまじく候事

一 床脇に棚飾りあるべし。尤も前座、木拵えの飾り大概図の通り

志野棚飾り



蒲紙・内十香割盤・仮包を入る

- 一 右志野棚飾りなり。ほかの棚なれば、その飾りあるべし。すべて「行」の心得なり。
- 一 志野棚飾り、上棚、十種香箱、袋に入れ横に置く。緒結び、時の結びなり。
- 一 中棚、乱箱の内に香盤、墨染入、敷紙の内に仮包、香割盤入れ。
- 一 花月香惣包、惣包の通り組み込み置きなり。
- 一 袋棚の上に香炉一対かき上げ灰にて並べ置きなり。
- 一 地板の上に記録紙、硯箱置きなり。
- 一 花月香伝書、床の間、軸先・軸脇を考へ出し置くべし。
- 一 当日、刻限に至り、師弟とも礼服用。香席へ罷り通り一礼これ有り。「切熨斗」持ち出し、挨拶終えて、師弟とも祖師へ拝礼これ有り。
- 一 右、相済み供香は

〔志野棚飾りの図〕

敷紙の内に香割盤、仮包を入れ置きなり。

志野棚飾りの図 [図] 十種香箱

- 染墨入
- 香盆 惣包
- 紙硯
- 敷紙

双香炉

- 右、志野棚飾りなり。ほかの棚なれば、その飾りあるべし。すべて「行」の心得なり。
- 一 志野棚飾り、上棚、十種香箱、袋に入れ横に置く。緒結び、時の結びなり。
- 一 中棚、乱箱の内に香盤、墨染入、敷紙の内に仮包、香割盤入れ。
- 一 「花月香」惣包、惣包の通り組み込み置きなり。
- 一 袋棚の上に香炉一対かき上げ灰にて並べ置きなり。
- 一 地板の上に記録紙、硯箱置きなり。
- 一 花月香伝書、床の間、軸先・軸脇を考へ出し置くべし。
- 一 当日、刻限に至り、師弟とも礼服用。香席へ罷り通り一礼これ有り。「切熨斗」持ち出し、挨拶終えて、師弟とも祖師へ拝礼これ有り。
- 右、相済み供香は

香筋ありく香と湯焚束包紙に納む。中立の時に香炉持入
事も有り。時に順うべし。

一 中立後の飾り替へ、時の働きあるべきなり。

一 花月香の伝書、床より下げ、盆ともに門人へ渡す。一覽これ有るべき旨、
申渡しなり。

一 起請文請取り、一覽、挨拶。直に床上に置くなり。

一 花月香伝授の一卷、左の通りなり。

許可

御家流香道の志厚きに依りて「真花月香相伝」畢んぬ。実感恐切

而巳(のみ)花月香は、香組六種、陰陽六の木所五味を加味して、今
伝授の木所五味は心中の独り修行にして口伝。形にも伝え
がたし。「香道三ヶの秘事」の一なり。香道の一部、五味の修行
懈怠無く会得に及ばば「連理」の極秘に迫らん。依つて花月香
一会始終、両香元の式法、今口授する者なり。

口授式法
一 六木所陰陽五味の事
一 花月香札の事
一 同折居の事

一 花月香の香組六種、陰陽六の木所五味を加味して、今
伝授の木所五味は心中の獨り修行にして口伝。形にも伝え
がたし。「香道三ヶの秘事」の一なり。香道の一部、五味の修行
懈怠無く会得に及ばば「連理」の極秘に迫らん。依つて花月香
一会始終、両香元の式法、今口授する者なり。

一 六木所陰陽五味の事

一 花月香札の事

一 同折居の事

- 一 同打敷一本
- 一 香席前後左右着順一本
- 一 前後座敷飾り一本
- 一 木拵之式一本
- 一 香組様一本
- 一 両香元手続式法一本
- 一 乱箱道具組様一本
- 一 記録認め様、点星式法一本
- 一 驚立て様一本

- 一 銀葉置き様の事
- 一 灰押し様の事
- 右、花月式秘事為りと雖も図書の口博等、残らず今相伝畢んぬ。
- 他見及び口授直伝許すべからざる者なり。

年号月日

何の誰
名乗 朱印居判

真花月香伝書 何氏へ 一卷

右傳書結構好次第、勿論、軸付にて送る事なり。
上包、美濃紙折掛、紅白水引結び、慰斗包添えるなり。

- 一 同打敷の事
- 一 香席前後左右着順の事
- 一 前後座敷飾りの事
- 一 木拵之式の事
- 一 香組様の事
- 一 両香元手続式法の事
- 一 乱箱道具組様の事
- 一 記録認め様、点星式法の事
- 一 驚立て様の事

一 銀葉置き様の事

一 灰押し様の事

右、花月式秘事為りと雖も図書の口博等、残らず今相伝畢んぬ。

他見及び口授直伝許すべからざる者なり。

年号月日

何の誰

名乗 朱印居判

真花月香伝書 何氏へ 一卷

右、伝書結構好次第、勿論、軸付にて送る事なり。
上包、美濃紙折掛、紅白水引結び、慰斗包添えるなり。

一 高貴人へ相傳の時、文言、敬文なるべし。白木・塗台その時宜に任すべし。

右師弟應對相濟招合、遠元一坐招入一儀の上にて、着座相濟み、相手香元、執筆とも取り定むべし。高貴人上席といえども、伝授の節は当人上席に進み候なり。尤も時宜に任すべし。一統着座を見て宗匠勝手へ入り、木拵えの道具包懐中し出て、木拵えに取り掛かるべき旨挨拶有るなり。木拵えの手續、香元習いの処委しく記すなり。木拵えの式法「真行草」さして替る事なし。されども道具取合せ「行」の心得あるべし。初座には「花方」「月方」左右両

一 香元着席、定まる法なし。申合せ、座入りこれ有るべし。時宜に任すべし。

一 香席後座着座式法の通り

花方連衆着座

△ 執筆役、香炉取次ぎ

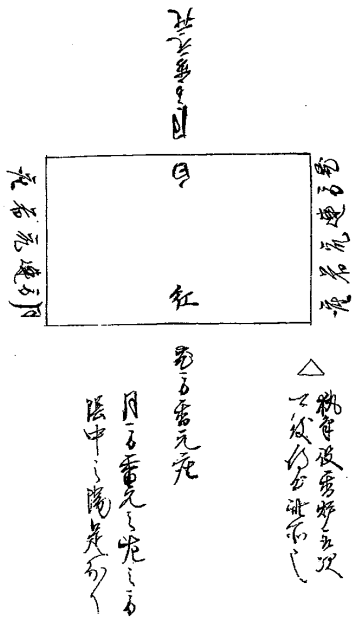
致すべき得心、此の所なり

月方香元座 白 [図] 紅 花方香元座

月方香元の左の方

「陰中の陽」これなり。

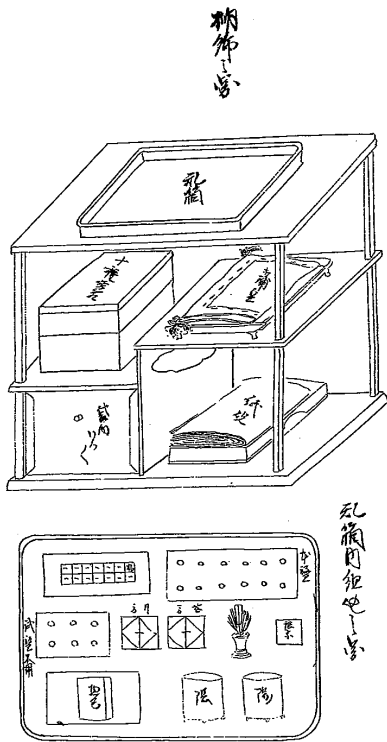
月方連衆着座



一 香棚飾り初座木拵へ飾り、前に記す通りなり。後座の飾りも常の香会へ通り、棚より色々有り。まず上棚に「乱箱」、中棚に香盆に打敷を載せて飾り置く。または宗匠、勝手より打敷は香盆に載せて持出す事も然るべく候。袋の上に「十種香箱」袋を外して豎に置き、地板の上には「記録紙」「料紙」「硯箱」置く。袋の内には「代（替）香炉」「炭団箱」「重硯」等、入れ置く事なり。飾り、大躰図の通りなり。乱箱の内「札筒」「火末入」除く。「香匙」は不用事なれども、時宜によりて飾り添える事も有るべし。

一 「打敷盤」無しに致す事、「行」の式法に申し伝うといえども、平日の香会にも

「打敷盤」用いる事有る故、時宜により盤にて扱ふべし。



〔棚飾の図〕

〔乱箱内組込の図〕

〔図〕 乱箱

〔図〕

打敷盆

紙硯

本香盤

銀葉

花方

陽

十種香箱

袋内いろいろ

月方

陰

試盤不用

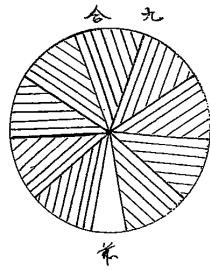
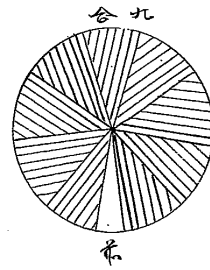
惣包

一 灰押し、花月香箸目九合分盤、張流香炉箸

小割り、差別、箸目

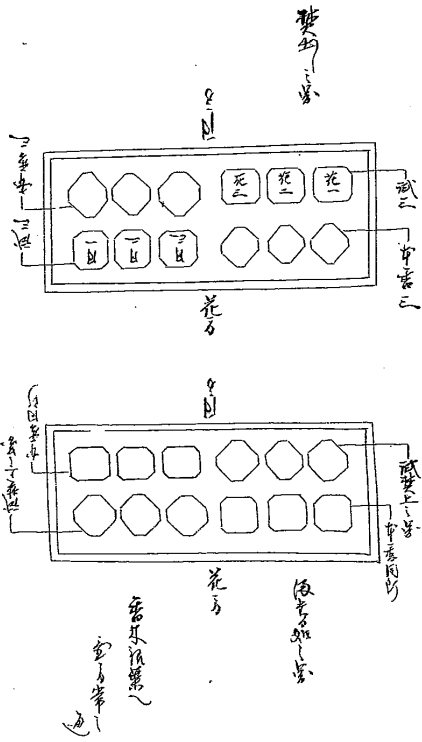
陰の箸、右より押し初むなり

陽の箸、左より押し初むなり



一 銀葉盤、花月香は十二居にて、外に試ばん(盤)用いず。「花方」
月方、銀葉置き方、火末上げ方差別あり

銀葉置方(花)



一 灰押しよう、花月香箸目「九合」なるべし。陰陽香炉箸目、

小割りの差別、此の図の如くなり。

〔陰陽の箸目の図〕

陰の箸、右より押し初むなり

陽の箸、左より押し初むなり

九合 [図] 前

九合 [図] 前

一 銀葉盤、花月香は十二居にて、外に試ばん(盤)用いず。「花方」
「月方」銀葉置き方、火末上げ方差別あり。

銀葉置方図の通り

〔銀葉置方の図〕

焚出しの図

満ちたる処の図

試三 本香三

試焚上の図 本香同断

月方 [図]

花方

月方 [図]

花方

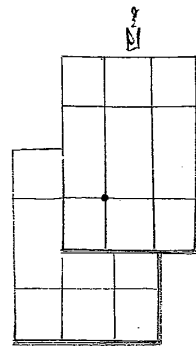
本香三 試三

本香同断 試焚上の図

香木、銀葉へ

置き方常の通り

一 両香元故驚真直ぐに立て本香包を寄し通指あり



指は花よりさし、それより月方と隔にさすなり

一 但預き六種に木所略に記す通

香六種 花一花二花三 各二包づつ、内一包宛試に出す

真花月香六の木所に五味を重ねて伝うる事なれば

兼々相正し、木所小記録に記し、香銘吟味して組むべき事なり。また、木拵え大節なり。

兼々相正し、木所小記録に記し、香銘吟味して組むべき事なり。

花一 伽羅 花二 羅國 花三 寸門多羅

月一 真那斑(蜜) 月二 真那伽(賀) 月三 佐曾羅

右の通り組合事なれども、五味の吟味によって木所、前後

左略、時に応ずべし。

一 記録認様、先ず記録紙「鳥の子紙」四方一分、縁紅式法なり。伝授の節、門弟へ火末、記録とも渡すべきなり。兩人義同時に伝授の時は、銘々へ記録認め遣わす事なり。記録、兼ねて認め置くもよし。また、当日香拵えの席にて

一 両香元「驚」真直ぐに立て、本香包、図の通り指(刺)すべし。
「香包驚刺処の図」

指し様は花方よりさし、それより

月方と隔にさすなり

月方 [図]

花方

一 (香)組様は、六種にして木所は初に記す通りなり。

香六種

花一 花二 花三

月一月二月三月 各二包づつ、内一包宛試に出す

「真花月香」六の木所に五味を重ねて伝うる事なれば

兼々相正し、木所小記録に記し、香銘吟味して組むべき事なり。また、木拵え大節なり。

花一 伽羅 花二 羅國 花三 寸門多羅

月一 真那斑(蜜) 月二 真那伽(賀) 月三 佐曾羅

右の通り組合事なれども、五味の吟味によって木所、前後

左略、時に応ずべし。

一 記録認様、先ず記録紙「鳥の子紙」四方一分、縁紅式法なり。伝授の節、門弟へ火末、記録とも渡すべきなり。兩人義同時に伝授の時は、銘々へ記録認め遣わす事なり。記録、兼ねて認め置くもよし。また、当日香拵えの席にて

後座両香元の儀一変

一 後座床飾り、棚飾り相済み、案内次第各席へ入り着座以前、床並び棚飾り等
拝見して、座順定まり候通り連衆残らず着座す。「花方」香元、勝手口より
香盆に打敷を載せ持出す。香元座に敷きて、香盆は「花方」の右に置き、
乱箱を取りおろし、香元右の方に置く。硯箱取りて執筆に渡し、末より
座に着き、「月」の香元へ挨拶して、乱箱の方に角掛けて居(すわ)る。乱箱より
道具、打敷の上へ飾付くるなり。但し、連衆座入前より香元座に毛氈を
敷き付け置く事有り。これ座順紛らわさぬためなり。

一 銀葉盤、取りて打敷の真中に置くべし。

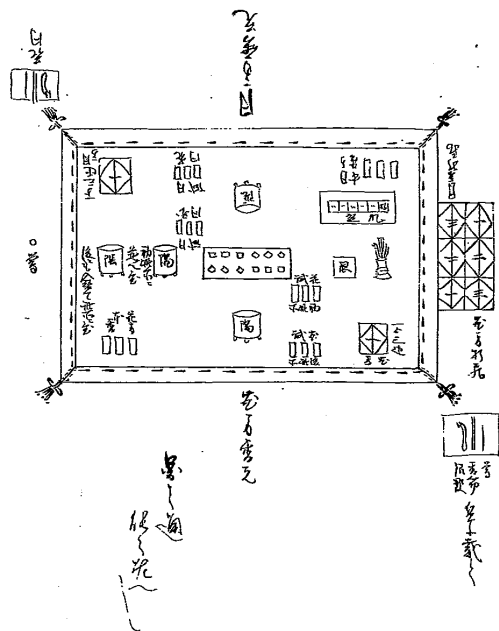
- 二 札箱、盆ともに取り、右の方向こう図の処に置くなり。
- 三 香炉、先ず陽の炉、次に陰の炉、図の通りに置くなり。
- 四 香惣包を取り開き、「花方」試、「月方」試、図の如く並べ、本香も
定座に並らべ、惣包は、乱箱へ入れ乱箱少し跡へ引き下るなり。
- 五 折居を取りて、花方「一」「二」「三」我が前、図の通りに置き、
月方は、向こうへ図の通り置く。
- 六 銀葉入、図の通り置くなり。
- 七 香筋立取りて、図の通りに置くべし。

後座両香元手続習之事

一 後座床飾り、棚飾り相済み、案内次第各席へ入り着座以前、床並び棚飾り等
拝見して、座順定まり候通り連衆残らず着座す。「花方」香元、勝手口より
香盆に打敷を載せ持出す。香元座に敷きて、香盆は「花方」の右に置き、
乱箱を取りおろし、香元右の方に置く。硯箱取りて執筆に渡し、末より
座に着き、「月」の香元へ挨拶して、乱箱の方に角掛けて居(すわ)る。乱箱より
道具、打敷の上へ飾付くるなり。但し、連衆座入前より香元座に毛氈を
敷き付け置く事有り。これ座順紛らわさぬためなり。

一 銀葉盤、取りて打敷の真中に置くべし。

- 二 札箱、盆ともに取り、右の方向こう図の処に置くなり。
- 三 香炉、先ず陽の炉、次に陰の炉、図の通りに置くなり。
- 四 香惣包を取り開き、「花方」試、「月方」試、図の如く並べ、本香も
定座に並らべ、惣包は、乱箱へ入れ乱箱少し跡へ引き下るなり。
- 五 折居を取りて、花方「一」「二」「三」我が前、図の通りに置き、
月方は、向こうへ図の通り置く。
- 六 銀葉入、図の通り置くなり。
- 七 香筋立取りて、図の通りに置くべし。



右席有する香中伏取捌、火箸灰柳箒帚と改香盆の上
 に並べ置時、月方香元執筆の内膳手へ火取香炉、盆とも
 持出すを「花方」香元請取り、香炉の火を取替え、灰を押し「月方」
 香元へ火加減を乞う。その上にて箸目九合に連衆「箸目所
 望」あらば、その内に「二の炉」の灰箸目するなり。それより火道具習いし通りに
 改め、「銀鉢」「香筋」「鶯」と取替え、これも改めて盆の上に並べ置く。両香炉の
 返るを請取りて前に置き、さて札盆を取り上客へ出す。客、請取り、次客
 へ一礼して札を取る。順々客此の通りなり。末客より香元へ札盆返る時、直に
 乱箱に納む。それより「銀葉」を「銀盤」へ法の通り並べ、一片香炉に置き

「両香元打敷据付の図」

月方折居

花方折居

鶯 香筋 銀鉢 盆に載せて

「香筋建」 一より三まで 花方

月方本香 札盆

銀

花試 初め此の所 花試 後此の所

月方香元

陰

「香盤」

陽

花方香元

月試 同花

月試 同花

陽 初め此の所に並べ置く

一より三まで月方

花方本香

陰 後にも入替えて此の所に置く

花同

鶯

右、飾付け終りて、香巾を取捌き、火箸、灰押、羽箒と拭き香盆の上
 に並べ置く。此の時「月方」香元、執筆の内、勝手へ入り、火取香炉、盆とも
 持出すを「花方」香元請取り、香炉の火を取替え、灰を押し「月方」
 香元へ火加減を乞う。その上にて箸目九合に連衆「箸目所
 望」あらば、その内に「二の炉」の灰箸目するなり。それより火道具習いし通りに
 改め、「銀鉢」「香筋」「鶯」と取替え、これも改めて盆の上に並べ置く。両香炉の
 返るを請取りて前に置き、さて札盆を取り上客へ出す。客、請取り、次客
 へ一礼して札を取る。順々客此の通りなり。末客より香元へ札盆返る時、直に
 乱箱に納む。それより「銀葉」を「銀盤」へ法の通り並べ、一片香炉に置き

火加減としく、中香焚きと候、一々焚かざる連元残
候首に試、試一「花二」「花三」焚出す。「花方」試終りて、香炉を
退し、左に据えて、右にて向こう前と
廻し、「月方」香元へ渡す。「花方」香元退く。「月方」香元
請取り、右の脇、図の処に置く。香炉を前に直し、連衆へ一礼、各
頓首す。それより月の試、月方より廻す。逆に出すことなり。「月方」試終り、
香炉を元の処に置き、火道具、香盆を取上げ、「花方」香元へ渡して
退く。「花方」香元進み出で、請取り、右の方、元の処へ置き香炉を
前に直し、「本香焚出し候。御安座成らせ候へ。」と挨拶す。それより本

香焚き出す。「鶯」を取りて図の処へ豎に指すなり。それより「一」の折居出す。
三包焚終りて、折居、図の処へ「一」「二」「三」と置くなり。また火道具、香盆を
取り揚げ、「月方」香元へ渡す事、初のごとし。「花方」香元退
く。
「月方」香元、本香三包焚終りて一礼、各頓首す。「札箱」を
連衆へ廻す。札箱、各載せ返す。さて、「月方」香元、札を並べ、執筆、
記録を写し「花方」香元、「鶯」を打返し本香を開き、吟じ、点星、
座中の宗匠たる人に乞う事なり。また、執筆に指図も有るべし。
それより「乱箱」少し引出して、道具残らず組入れ、「月方」香元へ挨拶
有りて、元の棚へ「乱箱」上げ、「硯箱」も同様、打敷は道具置の

香盆に據え、勝手へ持入るとも、または盆とも中棚へ揚げ置くもよろし。これにて
 式法始終終るなり。さて、両香元並んで一礼、各一礼あるなり。
 右、伝授相済み、師弟とも拝礼有りて、別間に退き「吸物」「酒」等
 差出し、盃事あるべし。
 一 相伝の為、報礼、師匠へ身分相応の贈物これ有るべく候なり。後礼の為
 参上の節、相送るべきの事
 一 花月香相済み、順立の書物、秘書、追って相渡すべき事
 一 五味伝の儀は、試香焚き出す節、「辛」「甘」「苦」「酢」「鹹」「是は何々味」
 と名乗りて焚出すべし。是にて「五味」を伝うる事なり。

一 眞花月香式法、吹聴の為、同流同門、花月香伝相済み候仁、相招き、
 眞花月香式法、前座、後座、出香、連中そのほか木拵えの式、常
 香会に替る事なしといえども、何れにも「行」の式法、諸飾り、会席向
 その得心有りて、麁略の儀無き様、連衆、高貴人これ有るとも、師匠
 を今日の上客になし、陰陽五味の訳は常の式には、その沙汰
 時宜に任すべし。
 右、眞花月式法、木所五味、秘中の一なれば、努々他見他言許すべからざる
 ものなり。

古通香式法、木所五味、秘中の一なり、努々他見他言許すべし
 月日
 何の誰殿
 何の誰殿
 北判朱印

文化九申年六月吉祥日

無耳庵克誠

文化九申年六月吉祥日

無耳庵克誠
花押

令和七年一月

『香筵雅遊』 國井和裕